Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-24

東日本大震災の心理的影響に関する研究1 ： 2年後調査報告

齊藤, 誠一
岡本, 英生
則定, 百合子
松木, 太郎

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,10(1):87-92

(Issue Date)
2016-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009720

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009720

KOBE UNIVERSITY

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第10巻 第1号 2016
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Vol.10 No.1 2016

研究報告

東日本大震災の心理的影響に関する研究1
: 2年後調査報告

A study on psychological effects of the Great East Japan Earthquake1: the report about the investigation after two years passed

齊藤　誠一 *　　岡本　英生 **　　則定　百合子 ***　　松木　太郎 ****
Seiichi SAITO*　Hideo OKAMOTO**　Yuriko NORISADA***　Taro MATSUKI****

要約：本研究では，発生後2年以上経過する東日本大震災の心理的影響について，福島県とそれ以外に所在する大学の学生及び保護者を対象にして，震災の影響を受けやすいと考えられる心理的変数を取り上げ，探索的に比較検討することを目的とする。調査対象者は，大学生90名，保護者41名であった。分析の結果，外傷後成長については，学生では福島県内で被災した者の方が「新たな可能性」「人間としての強さ」が高く，保護者では福島県外で被災した者の方が「精神的変容および人生に対する感謝」が高く，学生と保護者では同じ福島県での被災経験でも外傷後成長への反映に差異が見られた。外傷後成長と他の心理的変数との関連については，学生では福島県内で被災した者は主観的幸福感，ハーディネス，レジリエンスとの中程度の関連が見られたが，福島県外の学生ではこれらの変数とは弱い関連しか見られなかった。他方，保護者では福島県内で被災した者は主として主観的幸福感，ハーディネスと，福島県外で被災した者が主観的幸福感，ハーディネス，レジリエンスと関連が見られた。

問題と目的

我々は，阪神淡路大震災の心理的影響に関する長期的研究（齊藤・西田，2001など）から，時間の経過とともに，心的外傷は軽減していくものの，生活再建による生活ストレスなどが加わることを明らかにしてきた。このことからも，発生後2年経過する東日本大震災の心理的影響は未だ大きいものと思われる。とりわけ，福島県は地震，津波による被害に加えて，東京電力福島第一原子力発電所事故による放射線被害もあり，多様な心理的影響を受けていることが予想される。その意味で震災による多重の被害を受けている福島県を対象地域として，震災の心理的影響を検討する意義は大きいものと考えられる。

これまで震災の心理的影響の指標として心的外傷後ストレス障害（PTSD）が注目されてきたが，本研究では震災から2年が経過した時点での心理的影響を検討すること，放射線被害の影響も考慮し，地震それ自体による被害が小さい地域も対象とすることから，震災によるPTSD反応の継続と緩和に個人差などが大きいものと考えられるため，心理的影響の指標に震災などによるトラウマ経験を契機とする外傷後成長（PTG）を設定する。東日本大震災による外傷後成長について，すでに宅（2014）が大学生を対象に検討し，震災が自己の信念や他人とのつながりなどを再考させることを明らかにしており，大学生である青年にとって震災が外傷後成長の契機になるものといえる。本研究では，大学生とは異なる被災経験や被災以降の生活経験を有し，多様な役割を担っている成人にも対象を広げ，青年と成人にとっての心理的影響を明らかにするとともに，その差異を検討することを第一の目的とする。

ところで，震災によるストレスに対処する上で重要であると考えられる心理的変数としてハーディネスおよびレジリエンスがあげられる。まず，前者は強いストレッサーに対しても健康を維持できるような人たちがもつ頑健性であり，ストレス軽減効果が認められている（山崎・山崎，2004；田中・桜井，2006；林・丹野，2010）。他方，後者は復元力や回復力を意味する用語であり，心理学の文脈では逆境や困難状況にあっても，それに適応する過程や心理的特性ということができる。この両者と外傷後成長の関連について，仁平（2015）はハーディネスが強いストレスに対しても精神的健康を維持させるのに対して，レジリエンスは強いストレスにより一時は低下した精神的健康を元の水準に回復をさせるだけなく，それ以上の精神的成長（外傷後成長）をもたらすとしている。

さらに，同じ被災状況や復興状況であっても，そこに置かれた際の心理的状況には個人差が大きく，物理的状況が心理的状況を決定するわけではないことから，現在の自己のありようの評価に

*　神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授
**　奈良女子大学研究院生活環境科学系臨床心理学領域教授
***　和歌山大学教育学部准教授
****　神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

（2016年3月31日　受付
2016年7月1日　受理）

震災の心理的影響が関わっているものと考えられる。そこで，その指標として，現在の自己及び自己に関連する多様な領域についての主観的な幸福度や健康度を示す主観的幸福感を用いることとする。

以上の観点から，ハーディネス，レジリエンス，主観的幸福感，外傷後成長の関連についての実証的証拠を得ることを第二の目的とする。

方　法

調査協力者

福島県，宮城県，山形県，栃木県に所在する大学の学生90名（男性39名，女性50名，不明１名，平均年齢20.96歳（*SD* = 1.34））および保護者41名（男性13名，女性27名，不明１名，平均年齢52.44歳（*SD* = 4.68））。

調査手続きと倫理的配慮

2013年１～２月，授業時間などにおいて，以下の調査内容を含む学生用質問紙と保護者用質問紙が封入された封筒を学生に配布し，協力を求めた。封筒の表紙には，回答の拒否や中止がいつでもできること，回答の拒否や中止による不利益は生じないことが記載されており，回答したことにより同意を得たものとみなした。なお，回答は学生用，保護者用それぞれに同封した封筒により，郵送返送を求めた。

調査内容

①　被災状況

東日本大震災被災時の所在地（福島県内／福島県外），住まいの被害程度（「被害なし」「家具などが倒れた」「建物が一部損壊」「建物が大きく損壊」の４件法），自身の損傷程度（「無事」「軽傷」「病院へ行くほどの怪我」の３件法）をそれぞれ尋ねた。

②　外傷後成長

宅（2010）によって作成された日本語版外傷後成長尺度を用いた。「他者との関係」（「トラブルの際，人を頼りにできることが，よりはっきりとわかった」など６項目），「新たな可能性」（「新たな関心事を持つようになった」など４項目），「人間としての強さ」（「自らを信頼する気持ちが強まった」など４項目），「精神的変容および人生に対する感謝」（「自分の命の大切さを痛感した」など４項目）の４下位尺度18項目から構成され，「感じなかった（０点）」～「かなり強く感じた（５点）」の６件法で回答を求めた。

③　主観的幸福感

伊藤・相良・池田・川浦（2003）によって作成された主観的幸福感尺度を用いた。「人生に対する前向きな気持ち」（「自分の人生はおもしろい」など３項目），「自信」（「ものごとが思ったように進まない場合でも，その状況に適切に対処できる」など３項目），「達成感」（「これまで成功したり出世したと感じる」など３項目），「人生に対する失望感」（「自分の人生は退屈だとか面白くないと感じる」など３項目），「至福感（「非常に強い幸福感を感じることがある」など３項目）の５下位尺度15項目から構成され，「いいえ（１点）」～「はい（４点）」の４件法で回答を求めた。

④　ハーディネス

田中・桜井（2006）によって作成されたハーディネス尺度を用いた。「コミットメント」（「生きがいを感じているものがある」など６項目），「コントロール」（「努力すれば，たいていのことは自分の力でできると思う」など６項目），「チャレンジ」（「自分とは異なる考えを持つ人と話すことは好きである」など６項目）の３下位尺度18項目から構成され，「いいえ（１点）」～「はい（４点）」の４件法で回答を求めた。

⑤　レジリエンス

平野（2010）によって作成された二次元レジリエンス要因尺度を用いた。資質的レジリエンス要因である「楽観性」（「困難な出来事が起きても，どうにか切り抜けることができると思う」など３項目），「統御力」（「つらいことでも我慢できる方だ」など３項目），「社交性」（「交友関係が広く，社交的である」など３項目），「行動力」（「自分は粘り強い人間だと思う」など３項目）と，獲得的レジリエンス要因である「問題解決志向」（「人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする」など３項目），「自己理解」（「自分の性格についてよく理解している」など３項目），「他者心理の理解」（「人の気持ちや，微妙な表情の変化を読み取るのが得意だ」など３項目）の７下位尺度21項目から構成され，「いいえ（１点）」～「はい（５点）」の５件法で回答を求めた。

結　果

１．被災状況

東日本大震災被災時の所在地，住まいの被害程度，自身の損傷の程度をTable １～３に示した。学生の半数，保護者の４割が福島県で被災し，残りの者が宮城県，山形県，秋田県などで被災していた。また，福島県で被災した学生および保護者の４割以上が一部損壊以上の住まいの被害を受けていた。他方，自身の損傷については，２名が軽傷を負った以外は無事であった。

Table 1　東日本大震災被災時の所在地（n (%)）

	福島県内	福島県外	合計
学生	45 (50.0)	45 (50.0)	90 (100.0)
保護者	17 (41.5)	24 (58.5)	41 (100.0)

Table 2　東日本大震災被災による住まいの被害の程度（n (%)）

		被害なし	家具などが倒れた	建物が一部損壊	建物が大きく損壊	合計
学生	福島県内	11 (24.4)	16 (35.6)	15 (33.3)	3 (6.7)	45 (100.0)
	福島県外	26 (57.8)	9 (20.0)	10 (22.2)	0 (0)	45 (100.0)
保護者	福島県内	2 (11.8)	7 (41.2)	6 (35.3)	2 (11.8)	17 (100.0)
	福島県外	14 (60.9)	4 (17.4)	4 (17.4)	1 (4.3)	23[a)] (100.0)

a) 無回答1名

Table 3　東日本大震災被災による自身の損傷の程度（n (%)）

		無事	軽傷	病院へ行くほどの怪我	合計
学生	福島県内	43 (97.7)	1 (2.3)	0 (0)	44 (100.0)
	福島県外	44 (100.0)	0 (0)	0 (0)	44 (100.0)
保護者	福島県内	16 (94.1)	1 (5.9)	0 (0)	17 (100.0)
	福島県外	24 (100.0)	0 (0)	0 (0)	24 (100.0)

２．基礎的分析

（１）学　生（Table ４）

外傷後成長：「新たな可能性」「人間としての強さ」で有意差が認められ，福島県内で被災した学生の方がいずれの得点も高かった。また，福島県内で被災した学生は４つの下位尺度得点のいずれも３点（少し感じた）台であるのに対して，福島県外で被災した学生は「他者との関係性」だけが３点台であり，福島県内で被災した学生の方が福島県外で被災した学生よりいずれの得点も高

Table 4　被災時の所在地ごとの各変数の平均値と標準偏差および *t* 検定（学生）

	福島県内	福島県外	*t* 値	*d*
	M (*SD*)	*M* (*SD*)		
外傷後成長				
他者との関係	3.24 (1.20)	3.12 (1.13)	0.49	.10
新たな可能性	3.10 (1.22)	2.61 (1.05)	2.04 *	.43
人間としての強さ	3.10 (1.14)	2.42 (1.09)	2.89 **	.61
精神的変容および人生に対する感謝	3.11 (1.17)	2.84 (0.90)	1.19	.26
主観的幸福感				
人生に対する前向きな気持ち	2.59 (0.68)	2.97 (0.67)	−2.71 **	.56
自信	2.34 (0.58)	2.72 (0.68)	−2.84 **	.60
達成感	2.50 (0.52)	2.79 (0.49)	−2.72 **	.57
人生に対する失望感	2.69 (0.66)	2.53 (0.66)	1.12	.24
至福感	2.03 (0.66)	2.33 (0.68)	−2.09 *	.45
ハーディネス				
コミットメント	2.51 (0.60)	2.89 (0.71)	−2.74 **	.53
コントロール	2.54 (0.49)	2.74 (0.47)	−2.02 *	.42
チャレンジ	2.47 (0.46)	2.63 (0.58)	−1.44	.31
レジリエンス				
楽観性	3.47 (0.81)	3.73 (0.86)	−1.43	.31
統御性	3.16 (0.76)	3.27 (0.80)	−0.63	.24
社会性	2.96 (0.52)	2.97 (0.49)	−0.07	.02
行動力	3.26 (0.77)	3.63 (0.84)	−2.15 *	.46
問題解決志向	3.37 (0.77)	3.51 (0.69)	−0.88	.19
自己理解	2.82 (0.56)	2.86 (0.68)	−0.32	.06
他者心理の理解	3.35 (0.40)	3.35 (0.44)	0.00	.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 5　被災時の所在地ごとの各変数の平均値と標準偏差および *t* 検定（保護者）

	福島県内	福島県外	*t* 値	*d*
	M (*SD*)	*M* (*SD*)		
外傷後成長				
他者との関係	3.11 (1.15)	3.34 (1.04)	−0.67	.21
新たな可能性	2.51 (0.97)	3.03 (1.15)	−1.50	.48
人間としての強さ	2.88 (1.23)	3.40 (1.27)	−1.31	.41
精神的変容および人生に対する感謝	2.63 (0.93)	3.54 (1.04)	−2.90 **	.91
主観的幸福感				
人生に対する前向きな気持ち	2.56 (0.71)	3.01 (0.62)	−2.16 *	.68
自信	2.45 (0.66)	2.92 (0.54)	−2.48 *	.79
達成感	2.30 (0.66)	2.65 (0.57)	−1.82	.58
人生に対する失望感	2.53 (0.51)	2.15 (0.59)	2.12 *	.68
至福感	2.09 (0.58)	2.49 (0.63)	−2.05 *	.66
ハーディネス				
コミットメント	2.41 (0.83)	2.96 (0.69)	−2.32 *	.73
コントロール	2.56 (0.42)	2.82 (0.43)	−1.90	.61
チャレンジ	2.47 (0.49)	2.62 (0.49)	−0.97	.31
レジリエンス				
楽観性	3.51 (0.81)	3.81 (0.67)	−1.29	.41
統御性	3.33 (0.62)	3.63 (0.65)	−1.43	.47
社会性	2.94 (0.46)	3.11 (0.51)	−1.11	.35
行動力	3.58 (0.80)	4.01 (0.68)	−1.85	.59
問題解決志向	3.44 (0.78)	3.57 (0.75)	−0.53	.17
自己理解	3.02 (0.51)	3.22 (0.53)	−1.25	.38
他者心理の理解	3.36 (0.43)	3.31 (0.48)	0.35	.11

* $p < .05$, ** $p < .01$

く，外傷後成長を感じているものと思われる。

主観的幸福感：「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「達成感」「至福感」で有意差が認められ，福島県外で被災した学生の方がいずれの得点も高かった。特に，福島県外で被災した学生は前3者の評定値がニュートラルポイント（2.5）を越えており，より主観的幸福感を感じているものと思われる。

ハーディネス：「コミットメント」「コントロール」で有意差が認められ，福島県外で被災した学生の方が多様な事態への関与とそれらに対する統制感をより強く感じているものと思われる。

レジリエンス：「行動力」のみに有意差が認められ，福島県外で被災した学生の方が忍耐力によって物事を遂行していく傾向が高いものといえる。

（2）保護者（Table 5）

外傷後成長：「精神的変容および人生に対する感謝」のみで有意差が認められ，福島県外で被災した保護者の方の得点が高く，また他の下位尺度と比較して得点値が高いことから，震災を経験したことにより「精神的変容および人生に対する感謝」を感じていたといえる。

主観的幸福感：「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「至福感」「人生に対する失望感」で有意差が認められ，福島県外で被災した保護者の方が前3者の得点が高く，「人生に対する失望感」の得点が低かったことから，より主観的幸福感を高く感じているものと思われる。

ハーディネス：「コミットメント」で有意差が認められ，福島県外で被災した保護者の方の得点が高く，生活多様な事態への関与感をより強く持っていたものと思われる。

レジリエンス：いずれの下位尺度においても有意差は認められなかった。

2．外傷後成長と他の心理的変数との関連

（1）学　生（Table 6）

福島県内で被災した学生：「他者との関係」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」，ハーディネスの「コントロール」，資質的レジリエンスの「楽観性」「行動力」との間に中程度の有意な相関が見られた。また，「新たな可能性」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」，レジリエンスの「問題解決志向」との間に中程度の有意な相関が認められた。さらに，「人間としての強さ」については，主観的幸福感の「自信」，レジリエンスの「統御力」との間に中程度の有意な相関が見られた。他方，「精神的変容および人生に対する感謝」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」，ハーディネスの「コントロール」，レジリエンスの「社会性」「行動力」との間に中程度の有意な相関が見られた。

福島県外で被災した学生：外傷後成長と他の変数との相関はあまり高くなく，わずかに「他者との関係」について，レジリエンスの「他者心理の理解」との間に中程度の有意な相関が見られたにとどまった。

（2）保護者（Table 7）

福島県内で被災した保護者：「新たな可能性」については，主観的幸福感の「人生に対する失望感」と中程度の有意な負の相関，ハーディネスの「チャレンジ」との間に中程度の有意な相関が見られた。さらに，「人間としての強さ」については，主観的幸福感の「自信」「達成感」，ハーディネスの「コミットメント」との間に中程度の有意な相関が見られた。他方，「精神的変容および人生に対する感謝」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「達成感」「至福感」，ハーディネスの「コミットメント」との間に中程度の有意な相関が見られた。

福島県外で被災した保護者：「他者との関係」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「達成感」「至福感」，ハーディネスのすべての下位尺度との間に強いもしくは中程度の有意な相関が見られた。また，「新たな可能性」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「達成感」，ハーディネスの「コミットメント」「コントロール」，レジリエンスの「楽観性」「問題解決志向」との間に中程度の有意な相関が見られた。さらに，「人間としての強さ」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」，ハーディネスの「コミットメント」「チャレンジ」，レジリエンスの「行動力」「問題解決志向」との間に中程度の有意な相関が見られた。他方，「精神的変容および人生に対する感謝」については，主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「達成感」，ハーディネスの「コミットメント」「コントロール」，レジリエンスの「楽観性」「行動力」「問題解決志向」との間に中程度の有意な相関が見られた。

考　察

外傷後成長については，学生では福島県内で被災した者の方が「新たな可能性」「人間としての強さ」が高く，保護者では福島県外で被災した者の方が「精神的変容および人生に対する感謝および人生に対する感謝」が高く，学生と保護者では同じ福島県での被災経験でも外傷後成長への反映に差異が見られた。

外傷後成長と他の心理的変数との関連については，学生では福島県内で被災した者は主観的幸福感，ハーディネス，レジリエンスとの中程度の関連が見られたが，福島県外の学生ではこれらの変数とは弱い関連しか見られなかった。他方，保護者では福島県内で被災した者は主として主観的幸福感，ハーディネスと，福島県外で被災した者が主観的幸福感，ハーディネス，レジリエンスと関連が見られた。とりわけ，「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「コミットメント」「コントロール」との関連が強いことから，現実に対してポジティブに向き合い，それに強く関与し，それに対する統制感を持ち，自信や達成感を持つことが外傷後成長を強めるものと推測された。概して，福島県内で被災した者の方が相対的により強く関連する心理的変数が少ないのは，通常生活できる場所での放射線被害に対して，不安を感じながらも具体的な対処がしにくいことが関連しているものと思われる。

また，本調査協力者である学生及びその保護者は，福島県及びその近県で居住しており，地震のそのものの被害は小さく，むしろ低線量被爆の可能性を有していたことから，被災からの2年間における経験には個人差が大きいといえる。このことから，とりわけ保護者においては居住地が福島県内外を問わず，親として日々の生活に対する放射線被害を考慮しなくてはならず，そのことに対する統制感や達成感が心理的影響を与えたことが推察される。

Table 6　被災時の所在地ごとの外傷後成長と他の心理的変数との相関（学生）

	福島県内				福島県外			
	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ	精神的変容および人生に対する感謝	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ	精神的変容および人生に対する感謝
主観的幸福感								
人生に対する前向きな気持ち	.46 **	.48 **	.31 *	.43 **	.19	.18	.16	.12
自信	.47 **	.45 **	.45 **	.50 **	.04	.06	.15	−.06
達成感	.38 *	.24	.30 *	.36 *	.20	.14	.18	.17
至福感	.38 *	.16	.23	.38 **	.20	.26	.08	.06
人生に対する失望感	−.22	−.19	−.13	−.25	−.03	.01	−.08	.04
ハーディネス								
コミットメント	.20	.24	.14	.15	.09	.21	.08	.04
コントロール	.46 **	.39 **	.21	.44 **	.03	.14	.02	−.08
チャレンジ	.17	−.02	.26	.06	.08	.37 *	.18	−.10
レジリエンス								
楽観性	.40 **	.37 *	.36 *	.33 *	.03	.25	.10	−.05
統御性	.20	.07	.40 **	.13	.03	.04	.15	−.02
社会性	.39 **	.12	.23	.41 **	.09	.07	.17	.02
行動力	.40 **	.32 *	.39 **	.30 *	.07	.05	.07	.17
問題解決志向	.28	.51 **	.24	.46 **	.11	.11	.08	.03
自己理解	.05	−.05	.28	.02	.14	−.01	.15	−.01
他者心理の理解	.02	.19	.15	.13	.43 **	.13	.12	.18

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7　被災時の所在地ごとの外傷後成長と他の心理的変数との相関（保護者）

	福島県内				福島県外			
	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ	精神的変容および人生に対する感謝	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ	精神的変容および人生に対する感謝
主観的幸福感								
人生に対する前向きな気持ち	.24	.31	.26	.53 *	.62 **	.52 **	.56 **	.45 *
自信	.44	.36	.62 **	.67 **	.71 **	.52 **	.56 **	.57 **
達成感	.45	.24	.50	.56 *	.45 *	.59 **	.35	.41 *
人生に対する失望感	−.23	−.57 *	−.28	−.47	−.37	−.32	−.28	−.11
至福感	.50 *	.01	.45	.59 *	.46 *	.29	.31	.35
ハーディネス								
コミットメント	.25	.43	.48 *	.55 **	.59 **	.49 *	.41 *	.48 *
コントロール	.04	.21	.41	.41	.56 **	.53 **	.39	.63 **
チャレンジ	.01	.53 *	.31	.10	.44 *	.31	.47 *	.35
レジリエンス								
楽観性	.03	.32	.25	.32	.26	.43 *	.13	.46 *
統御性	.08	.27	.30	.34	.40	.15	.17	.31
社会性	.21	.13	.41	.36	.15	.12	.29	.21
行動力	−.08	−.04	.21	.12	.26	.37	.62 **	.68 **
問題解決志向	.06	.28	.36	.23	.29	.45 *	.52 **	.60 **
自己理解	.20	.10	−.04	.26	.29	−.01	−.01	.09
他者心理の理解	.18	−.08	.36	.26	.10	−.02	−.09	.10

* $p < .05$, ** $p < .01$

本研究では，被災2年後における被災状況や発達段階による外傷後成長の差異，外傷後成長といくつかの心理的変数との関連を中心に検討したが，今後は被災そのものによるストレスだけではなく，復興や生活再建に関わるストレス状況も高まることが予想されるので，こうした新たなストレスと外傷後成長について長期的な視点から検討していくことが必要といえる。

引用文献

平野 真理（2010）．レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み――二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成 パーソナリティ研究，*19*，94-106.

林　明明・丹野義彦（2010）．ハーディネスが主観的ストレスへ与える影響――ストレス負荷課題による検討　パーソナリティ研究，*18*，168-170.

伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子・川浦 康至（2003）．主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性 心理学研究，74，276-281.

仁平 義明（2015）．災害からのレジリエンス――被災者側の視点 学術の動向，*20* (7)，44-54.

齊藤誠一・西田裕紀子（2001）．阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究：5年後調査報告　神戸大学都市安全研究センター研究報告，*5*，251-257.

宅 香菜子（2010）．外傷後成長に関する研究――ストレス体験をきっかけとした青年の変容―― 風間書房.

宅 香菜子（2014）．悲しみから人が成長するとき―― PTG　風間書房.

田中 秀明・桜井 茂男（2006）．大学生におけるハーディネスとストレッサーおよびストレス反応との関係 鹿児島女子短期大学大学紀要，*41*，153-164.

山崎幸子・山崎久美子（2004）．大学生の心理的ストレス過程に及ぼすハーディネスの影響　日本保健医療行動科学会年報，*19*，88-104.

付　記

本研究は，平成24年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」の助成を受けて実施された。